

## ego-resilience が母親の養育態度に与える影響

目白大学人間学部 小野寺敦子

### 【要約】

本研究ではBlockによる14項目からなるER89を使って、ego-resilience (ER) の高さが母親の養育態度や子育て意識、子どもの性格評価とどのように関わっているかを検討した。その結果、ERの高い母親は、子育てに対する後悔があまりみられず自信をもって子育てをしており、柔軟な養育態度を示していた。それに対して、ERの低い母親は子育てでイライラすることが多く、子どもをたたいたり、「バカ」「ダメな子」と子どもを傷つけるような発言をする傾向が強かった。またERが低い母親ほどどうつ傾向が強い傾向がみられた。次に子どもを規則正しく生活させることがどのようにERと関係しているかを検討したが、ERの高い母親はきちんと規則正しい生活を子どもにさせる傾向があった。すなわちego-resilienceが高い母親は上手に子育てをし、精神的安定も高いといえよう。自己制御 (EC) を適正な状態に調整する機能を担うego-resilienceを高めていくことが、育児ストレスの高い現代の母親の子育てを支援するにあたって大切な要因であることが示唆された。

キーワード：ego-resilience, ego-control, ER89, 養育態度

### はじめに

Blockはやる気、情緒そして行動が個人の中でバランスよく機能していくための重要な要因としてego-control (以後EC) とego-resilience (以後ER) という概念を提起している (Block & Block, 1980)。まずECであるが、これは衝動の抑圧/表出に関連している概念である。Blockによれば、ECには2つの極が想定されており、その一方がovercontrol, 他方がundercontrolである。Overcontrolとは一言で言えば自分の欲求を極度に抑制することである。その抑制の程度が強すぎる人は自らの力で決定を下すことが出来なくなってしまい、不必要なまでに我慢し自分が楽しむことに罪悪感すら感じて周囲から孤立してしまう傾向にある。一方のundercontrolとは、overcontrolとは正反対の極にあり、自分の欲求の趣くままに行動をとることである。Undercontrolの傾向が強い人は、社会が適切な

行動を求める場面においても我慢はせずに、常に自分の欲求を押し通そうとするため人からわがままで身勝手であるといった評価を受ける場合がある。

そしてERは、この二極から成立しているECをその状況に適応できるように調節していく能力である。すなわち、ERとは状況が変化するにつれて一時的に変動するECを柔軟に調整し適切な適応状態へと向かわせる能力である。ERに関する研究はカルフォルニア大学バークレー校のBlockを中心に1980年代よりおこなわれてきた。ERの初期の研究ではERを測定する尺度として「The California Child Q-set」(CCQ)が使われていた。しかし現在では14項目からなるER89が発表されており、その尺度を使った研究がER研究の主流となっている (Block & Kremen, 1996)。例えばKlohn (1996)の研究ではストレスフルでターニングポイントと

なることが多い中年期の女性たちを対象に調査を実施し、ERの高い女性ほど中年期の生活への適応が良好であることを明らかにしている。またPals (1999) は1960年代に21歳から27歳であった女性たちのデータを分析し、ERと結婚が彼女たちのアイデンティティ確立を促す重要な要因であることを明らかにしている。さらにLetzring, Block & Funder (2005) によると、ERの高い人は低い人に比べて自分の成長につながる経験をしていることが多く、自分に対する自信もあり心理的適応能力が高いと考えられている。また彼らはストレスフルな状況に直面したときに、ERの低い人はかたくなな態度になり混乱してしまい、その結果、不適応行動を起こすと述べている。

さて心理学的な様々な場面でegoがついていないresilience, resiliencyという言葉が最近、よく耳にするようになってきている。特にアメリカ、ニューヨークでの同時多発テロ事件後、このresilienceに関する研究は非常に増えてきている。Masten & Reed (2002) は、resilienceとは「困難で脅威となる状況にもかかわらず、その状況にうまく適応する過程、能力」と定義している。また、英和辞書でresilienceを引いてみると、弾力、弾性、反発力、困難や変化などからの回復力（順応力）とある。このことからresilienceとは困難な状況にあったときに、その状況からなんとか抜け出て立ち直っていく力ということができよう。このresilienceを調べた有名な研究にWerner & Smith (2001) のハワイのカウアイ島での縦断研究 (Journeys from Childhood to Midlife) がある。同研究は1955年にカウアイ島で生まれたおよそ700名の乳児を40歳になるまで縦断的にみていくという大規模な研究である。これらの被験者のうちハイリスクな状態にあった子どもたちの三分の一は成人した後も良好な人生を送っており、共通の要因として高いresilienceをもっていたことをWerner & Smithは指摘している。すなわちresilienceの高い人は低い人に比べて自律心、独立意識、共感性、仕事への意欲、好奇心が強く人間関係も良好であった。こうした長期にわたる縦断研究より人生における逆境をはねのけていくのにresilienceが重要な要因であると考

えられるのである。

しかし、本研究ではこのresilienceではなく、ego-resilienceの概念を使って研究を進めることにした。それは母親が行う育児は、resilienceが定義するところの逆境というような究極の状況ではなくごく日常的な営みであるからである。さらにはそうした育児では親のego-control能力が問われることが多い。こうした視点にたち、本研究では母親のego-resilienceが子育て意識や養育態度、我が子の性格評価、うつ傾向などどのように関連しているかをみていくことにしたい。また先に述べたER89の日本語版は発表されていなかったため、2007年に畑・小野寺がERの14項目についての日本語化をはかったので、本研究でもその日本語版を使用することにした。

## 方法

### 調査対象者：

保育園および幼稚園にかよう子どもをもつ母親に対して園を通じて質問紙を450部配布し回収した。その中で回答に不備のあったものを除いた326名（平均年齢35.7歳）の母親について分析をおこなった。

### 調査項目：

- ①BlockによるThe Ego Resilience Scale (ER89) の14項目
- ②子育て意識と態度を尋ねた18項目（例：気がついたら子どもに小言をいっている。子どもが言うことをきかないとイライラする。子育てに自信がもてないと感じる）
- ③母親からみた子どもの性格を尋ねた11項目（例：のびのびしている。じっとしているのが苦手である）
- ④うつ傾向の程度を尋ねた2項目（気分が沈んで憂鬱な時がある。体も心も疲れ果てたと思う時がある）
- ⑤子どもの規則正しい生活に関する5項目（就寝時間・規則正しい生活（食事）をさせる。早寝早起きをさせる・外で遊ぶ・家の中で遊ぶ）

①から⑤までの項目（就寝時間を除く）に対して4段階評定（例：1. 全くあてはまらない

～4. 非常にあてはまる)で回答を求めた。さらに対象者の属性として年齢, 学歴, 職業の有無を尋ねた。母親の学歴は中学卒=6人, 高校卒=113人, 専門学校卒=72人, 短期大学卒=73人, 大学卒=50人, 大学院卒=3人, 未記入9人となっていた。職業の有無は, フルタイム=21人(6.8%), パートタイム・不定期=66人(21.4%), 無職(専業主婦)=222人(71.8%), その他と未記入が合わせて17名であった。

## 結果

### (1) ER尺度の因子分析結果 (Table 1)

Blockによる14項目からなるER89がどのような因子構造をもっているかを検討した。まず, 主因子法による因子分析さらには斜交プロ

マックス回転を実施した分析を実施したが, 納得できる因子構造を得ることができなかった。そこでBlockは本尺度は一因子構造であると提唱していたため, 主成分分析を行ったところ, 項目10(私は普段, 慎重に考えてから行動するほうだ)の因子負荷量が著しく低かったため, この項目を削除して, 再度主成分分析を行った。その結果, 表1に示すような13項目のすべてで負荷量が高い次元構造の結果を得ることが出来た。内的整合性を検討するために13項目の $\alpha$ 係数を算出したところ.811という値が得られた。そしてこれら13項目の素点を合計し合成得点を算出しER得点とした。

Table 1 ego-resilience 項目の主成分分析結果

	成分 1
3. 私は初めてのことや不慣れなことにでも, 楽しみながら取り組める	.724
8. 私は人よりも好奇心が強いと思う	.704
11. 私はいろいろ新しいことをするのが好きだ	.680
6. 私は人からとてもエネルギッシュな人だと思われる	.668
13. 私は自分が「たくましい」性格だと思っている	.620
12. 私は日々の生活の中で面白いと感じることによく出会う	.596
2. 私はショックなことがあっても早く立ち直るほうだ	.544
14. 私は誰かのことで腹を立てても, 比較的すぐに機嫌が直るほうだ	.495
7. 私はいつもの場所へ行くにも, 違う道を通ってみたりするのが好きだ	.458
9. 私の出会う人は, 魅力的な人が多い	.451
5. 私は今まで食べたことがない食べ物をすすんで試してみるほうだ	.423
4. 私は普段, 人に好印象を与えていると思う	.398
1. 私は友人に対して寛大であると思う	.372
	寄与率
	33.0%

10. 私は普段, 慎重に考えてから行動するほうだ = 削除項目  
 $n = 326$   $\alpha = .811$

Table 2 子育て意識と態度に関する項目の因子パターン (プロマックス回転後)

項 目	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5
<b>第1因子 子育てに対する後悔</b>					
私は子どもの育て方をまちがっていたかもしれない	.942	-.019	.072	.131	.044
子育てについて後悔することが多い	.894	.047	.060	.029	-.069
子育てに自信がもてないと感じている	.643	-.025	-.051	.115	-.061
<b>第2因子 子どもへの一体感</b>					
子どもと一緒に居る時が一番幸せである	.024	.798	.005	-.076	.070
子どものいない生活など考えられない	-.051	.689	-.047	-.026	.080
子どもとの生活は楽しい	.108	.503	-.010	.001	.032
子どもに早く大きくなって欲しいと思う反面, 離れていくのがさびしい	-.168	.485	.233	.106	-.104
<b>第3因子 柔軟な養育態度</b>					
子どもの言うこと・することをみていると面白い	.102	.041	.771	.161	.036
子どもの短所・長所に目が行くほうである	-.020	-.072	.541	-.093	-.064
色々な工夫をして子どもの気持を変える事ができる	-.013	-.048	.499	-.033	.033
子どもと同じレベルになって遊ぶことが苦にならない	.033	.115	.458	-.101	.145
<b>第4因子 イライラ</b>					
子どもが言うことを聞かないとイライラする	-.041	-.013	.062	.713	.090
疲れていると子どもにあたってしまうことがある	-.002	.000	-.009	.711	-.125
子どもをほめるより叱ることの方が多い	-.024	-.253	.061	.375	.035
気がついたら子どもに小言を言っていることがある	.176	.082	-.209	.280	.043
子どもがいると自分のやりたいことが出来ないと思う	.156	.111	-.180	.275	.231
<b>第5因子 体罰傾向</b>					
子どもに「バカ」「ダメな子だ」「役たたず」などと言う	-.009	.036	-.069	-.095	.774
子どもの頭や体のどこかをたたく	-.055	-.032	.170	.064	.693

因子間相関	F 1	F 2	F 3	F 4
F 2	-.227			
F 3	-.548	.411		
F 4	.587	-.210	-.491	
F 5	.456	-.073	-.442	.510

(2) 子育て意識と態度に関する項目の因子分析結果 (Table 2)

子育て意識と態度に関する18項目に対して主因子法による因子分析さらに因子間の相関が予想されたため斜交プロマックス回転を実施した。その結果、第1因子では「子どもの育て方が間違っていたかもしれない」「子育てについて後悔することが多い」などの項目で因子の負荷量が高かったため「子育てに対する後悔」因子と命名した。第2因子では「子どもと一緒にいる時が一番幸せである」「子どものいない生活など考えられない」などの項目で因子負荷量が高いことから「子どもへの一体感」因子とした。第3因子では「子どもの言うこと・することを見ていると面白いと感じる」「子どもの短所よりも長所に目がいく方である」などの項目で因子負荷量が高く「柔軟な養育態度」因子とした。第4因子は「子どもが言うことを聞かないとイライラする」「疲れていると子どもにあたってしまうことがある」の項目で負荷量が高いことから「イライラ」因子とし、さらに第5

因子では「子どもに『バカ』『ダメな子だ』『役立たず』などと言う」「子どもの頭や体のどこかをたたく」の2項目で因子負荷量が高かったので「体罰傾向」因子と命名した。各因子の $\alpha$ 係数は下記のようなであった。「子育てに対する後悔」=.829, 「子どもとの一体感」=.710, 「柔軟な養育態度」=.620, 「イライラ」=.686, 「体罰」=.648。

(3) 母親からみた子どもの性格評価に関する項目の因子分析結果 (Table 3)

母親が子どもの性格をどのように理解し評価しているかを明らかにする目的で設定した11項目について主因子法による因子分析さらにはバリマックス回転を実施した。その結果、第1因子は「のびのびとした子ども」因子 (例: のびのびしている。明るい。), 第2因子は「落ち着きのない子ども」因子 (例: 落ち着きがない。じっとしているのが苦手) の2因子が得られた (累積寄与率52.0%)。「のびのびとした子ども」因子の $\alpha$ 係数は.816, 「落ち着きのない子ども」

Table 3 子どもの性格評価に関する因子分析結果 (バリマックス回転後)

項目	F 1	F 2
第1因子 のびのびとした子ども		
のびのびしている	.816	.008
明るい性格だ	.742	-.047
積極的に遊びに参加できる	.735	.030
友達と仲良く遊べる	.592	-.296
第2因子 落ち着きのない子ども		
落ち着きがない	.335	.756
じっとしているのが苦手である	.372	.629
親の話を最後まできくことができない	-.030	.580
かんしゃくをおこす	-.06	.544
おもちゃなどを友達と順番に使ったり出来ない	-.116	.526
乗り物の中や大勢の人の中でダダをこねることがある	-.123	.408
欲しいものがあっても説得されれば我慢する (買い物に行った時など)	-.174	-.357
寄与率 (%)	26.2	25.7
累積寄与率 (%)	26.2	52.0

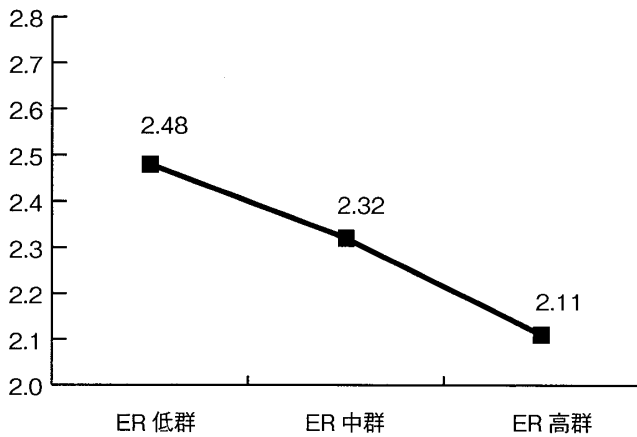


Fig. 1 子育てに対する後悔尺度得点と ER との関係

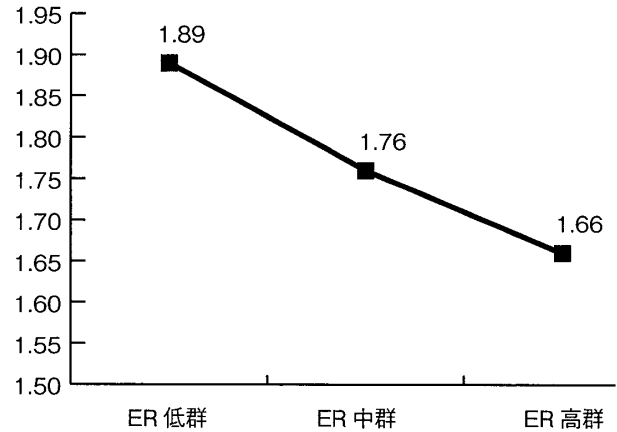


Fig. 2 体罰傾向尺度得点と ER との関係

因子の  $\alpha$  係数は .738 であった。

つづいて (1) (2) (3) の各因子の素点を合計し項目数で割り各因子の尺度得点を算出した。

(4) ER 得点と子育て意識と態度ならびに母親による子どもの性格評価との関連

ER 得点の高低によって子育て意識や態度、さらには母親の子どもとのとらえ方がどのように異なっているのかを明らかにする目的で次のような分析を行った。まず、(1) で明らかにした ER 得点に基づき ER の 3 群を構成した。ER 得点 Low 群は 120 名、Middle 群は 99 名、High 群は 94 名となっていた。その 3 群間によって子育て意識に関する 5 尺度得点および子どもの性格 2 尺度得点がどのように異なるかを一元配置

の分散分析さらには多重比較を行って検討した。これらの結果は Table 4 および Figure 1 ~ 4 に示した。

「子育ての後悔」尺度においては ER 得点が H 群と M 群・L 群との間に有意な得点差が認められており、ER が高い母親は子育てで後悔することが少なく自信をもっている傾向がみられた。次に子育てにおいてイライラしたり、疲れていると子どもにあたってしまうといった「イライラ」尺度および子どもに「バカだね」「役立たず」といったり身体をたたくといった「体罰傾向」尺度では ER の H 群・M 群 < L 群という結果になっていた。これは ER 得点が低い母親ほど疲れていて子どもに当たったり、子どもに対してイライラすることが多く、体のどこかをた

Table 4 ego-resilience 3 群 (LMH 群) 間における子育て意識・子どもの性格評価・うつ傾向の比較 (各群の平均値・SD・多重比較の結果を示す)

	L 群 120 名	M 群 99 名	H 群 94 名	F 値	多重比較
子育てに対する後悔	2.48 (.59)	2.32 (.62)	2.11 (.60)	9.53***	H < M, L
子どもへの一体感	3.22 (.58)	3.21 (.55)	3.29 (.53)	.68	n.s.
柔軟な養育態度	2.66 (.41)	2.85 (.39)	3.23 (.53)	21.22***	L < M < H
イライラ	2.79 (.47)	2.69 (.42)	2.61 (.51)	3.93*	H, M < L
体罰傾向	1.88 (.68)	1.76 (.59)	1.66 (.53)	3.70*	H, M < L
子性格 (のびのびとした子ども)	3.21 (.55)	3.21 (.45)	3.38 (.50)	3.86*	L, M < H
子性格 (落ち着きのない子ども)	2.20 (.51)	2.11 (.49)	2.03 (.46)	3.24*	H, M < L
うつ傾向	2.40 (.80)	2.17 (.86)	2.12 (.81)	3.64*	H, M < L

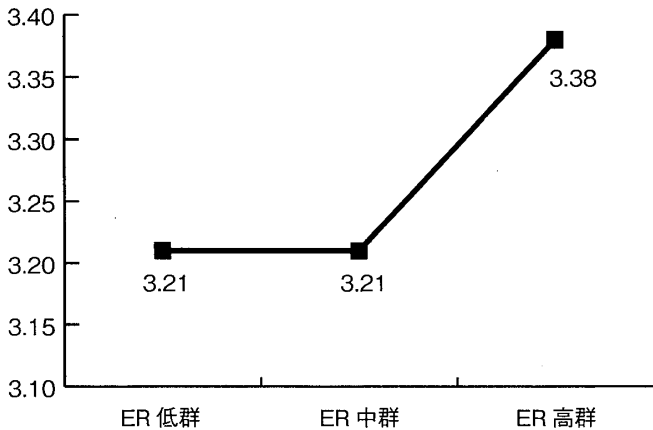


Fig. 3 のびのびとした子ども尺度得点と ER との関係

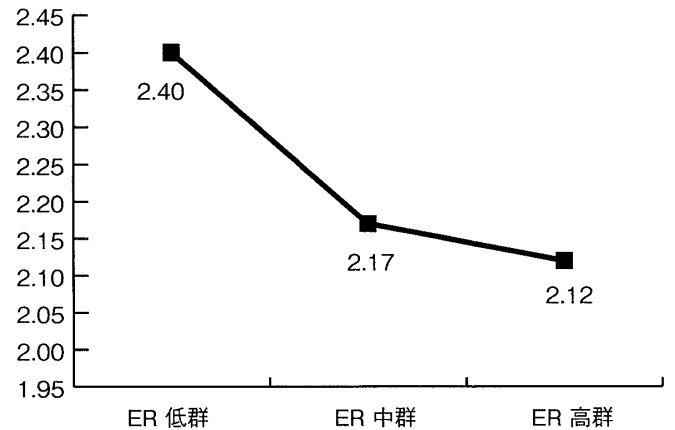


Fig. 4 うつ傾向と ER との関係

たいたり、バカ・ダメな子だといった発言をしていることになる。それに対し、子どもの言うこと・することをみていて面白いと感じ、よい面に着目して工夫しながら子どもに合わせていこうとする「柔軟な養育態度」尺度が一番高いのはERのHigh群であり、M群とH群、M群とL群との間にも有意差が認められた。育児を柔軟な態度でおこない子どものよさを大切にしようとする傾向があるのはER得点が高い母親であることがわかった。

#### (5) うつ傾向とERとの関連

うつ傾向には「気分が沈んで憂鬱な時がある」と「体も心も疲れ果てたと思う時がある」の2項目を設定していた。この両方の項目の素点を合計し項目数の2で割って「うつ傾向」得点とした。そして(4)と同じ方法でうつ傾向得点がERの3群によってどのように異なるかを一元配置の分散分析、および多重比較によって検討した。その結果、Table 4に示したように平均値はL群が2.40 (.80)、M群が2.17 (.86)、H群が2.12 (.81)、F値が3.64であり5%水準で有意差が認められた。多重比較の結果、M、H群<L群でありERが低い母親のうつ傾向得点があり他の2群よりも高い傾向があった。

#### (6) 子どもの基本的生活とERとの関連

子どもが規則正しい生活を送っていくことは毎日の生活の中でとても大切なことである。早寝早起きをさせ、しっかりと食事を取らせ、十分遊ばせるといった基本的生活を子どもにさせるには母親が努力して生活管理をする必要があ

る。本研究では、子どもの基本的生活の様子を知るために「就寝時間」「規則正しい生活(食事)をさせる」「早寝早起きをさせる」「外で遊ぶ」「家の中で遊ぶ」という項目を設定した。これらの項目の度数分布はTable 5・6に示した。

「子どもの就寝時間」では午後の21時台という回答が最も多く、22時台も14.5%、23時台という子どももわずかながら(3.1%)いた。「規則正しい生活(食事)をさせる」において「非常にそうである」と回答したものは148人(45.1%)「かなりそうである」は138人(42.1%)と大半の母親は食事には配慮していることがわかった。また「早寝早起きをさせる」では「非常にそうである」と回答したものは96人(29.6%)「かなりそうである」は137人(42.3%)「あまりそうではない」は74人(22.6%)、「まったくそうではない」は17人(5.2%)であった。就寝時間が遅い子どももいるというTable 5の結果からもわかるように早寝早起きをさせるということはなかなか難しい状況が推察された。

こうした子どもに規則正しい生活を送らせることと、母親のERとがどのように関係しているのかを相関係数を求めることで明かにした(Table 7)。この結果、ERの高い母親ほど、子どもに規則正しく食事をさせ早寝早起きをさせている傾向が明らかになった。実際に子どもを寝かす時間においてもERの高い母親は早く子どもを寝かしていた。遊びにおいては、外遊びをさせるよりも家の中で遊ばせることの方がERの高い母親は多い傾向があった。ことからERが高い母親は子どもが規則正しい生活を送

Table 5 子どもの就寝時間 (n = 325人)

19時台	20時台	21時台	22時台	23時台
13人 (4.0%)	84人 (25.8%)	171人 (52.6%)	47人 (14.5%)	10人 (3.1%)

Table 6 子どもの基本的生活に関する項目の度数分布

	全くそうではない	あまりそうではない	かなりそうである	非常にそうである
規則正しい生活(食事)をさせる	4人 (1.2%)	33人 (10.2%)	138人 (42.7%)	148人 (45.8%)
早寝早起きをさせる	17人 (5.2%)	74人 (22.8%)	137人 (42.3%)	96人 (29.6%)
子どもが外で遊ぶ	16人 (4.9%)	101人 (31.3%)	141人 (43.7%)	65人 (20.1%)
子どもが家の中で遊ぶ	1人 (0.3%)	56人 (17.6%)	173人 (54.4%)	88人 (27.7%)

Table 7 子どもの基本的生活とERとの関連 (相関係数を示す)

	就寝時間	規則正しい食事	早寝早起き	外遊び	家遊び
ego-resilience 得点	-.140*	.190**	.217***	.012	.138*

\* P < .05 \*\* P < .01 \*\*\* P < .001

れるように積極的にかかわっていることがわかった。

### 考察と今後の課題

本論文ではego-resilienceが母親の養育態度・子育て意識・子どもの性格評価などどのように関連しているかを検討した。ERを測定する尺度としてBlockによる14項目からなるER89を使用した。14項目に主成分分析を行ったところ1成分が抽出されたので、負荷量が著しく低かった1項目をはずし13項目を使ってER得点を算出した。子育て意識と態度に関する項目は因子分析の結果、「子育てに対する後悔」因子、「子どもへの一体感」因子、「柔軟な養育態度」因子、「イライラ」因子、「体罰傾向」因子の5因子が明らかにされた。さらに母親からみた子どもの性格評価に関する項目についても因子分析をおこない「のびのびとした子ども」因子と「落ち着きのない子ども」因子が得られた。ER得点を3群に分けてER得点の高低によって母親の養育態度、子育て意識、さらには子どもの性格評価がどのように異なっているかを検討し

た。その結果、ERの高い母親は自分の子育てに後悔することが少なく、自信をもっている傾向が見られた。また子どものよい点に目を向け、工夫をしながら柔軟に子どもとかわり、育児でイライラすることも他の2群よりも低い傾向がみられた。またERの高い母親は自分の子どもはのびのび明るい性格だととらえ、うつ傾向も低い傾向があった。それに対し、ERの低い母親は育児にイライラすることが多く、子どもは落ち着きがなくじっとしていることが苦手だととらえていた。さらにERの高い母親は、早寝早起き、規則正しい食事、家庭内での遊びといった基本的な生活に配慮し日々子育てに努力している傾向がみられた。

冒頭に述べたようにERは自己制御をしていく上で重要な役割を担っている。育児に対して最近の母親たちは多くの悩みをかかえ、子育てを楽しむどころかストレスフルな状況ととらえる傾向が近年、問題となっている。母親の中には、子どもに対して非常に厳しい養育態度(overcontrol)をとり子どもに体罰を加える人もいる。その一方で、ある母親は子どものこと



よりも自分の問題に精一杯で、子どもを無視し養育を放棄する母親（undercontrol）も出てきている。つまりovercontrolな養育態度でもundercontrolな養育態度でも子どもによい影響を与えないのである。ego-resilienceは2つの両極に分かれる養育態度を適切な養育態度に調整する力だと考えられるのではないだろうか。本結果からもERの高い母親は上手に子どもとかかわり自信をもって子育てをしている傾向が明らかになった。

今後の研究では本研究から得られた知見をもとに次のような点を考慮していきたいと考えている。

①ERの尺度およびその信頼性・妥当性の検討。

今回の調査ではER尺度は14項目中13項目を使用した。しかしその因子の寄与率が低かった点が問題としてあげられる。Blockらの尺度の邦訳に問題がある場合もあるので、今後は尺度としての精度をあげられるよう検討をしていきたい。

②本研究ではERが母親の養育態度とどのようにかかわっているかを中心に検討してきた。

今後はERをパーソナリティとしての個人的な要因としてとらえた場合、ERがどのような変数を媒介として養育態度さらには子どもの性格特性に影響していくのかを検討してみたいと考えている。

③BlockはERがECの調節機能を担っているとのべているが、実際にはundercontrol, overcontrol尺度は作成されていない。今後は、両方の尺度を開発しERとの関連性について検討していきたい。

こうした視点を取り入れた研究をおこなっていくことで、育児に困難を抱えている母親たちのERを高め子育て支援の一助となる提案ができれば幸いである。

## 【引用文献】

- Block, J. & Block, J., (1980), The role of ego-control and ego-resiliency in the organization of behavior, In W. A. Collins (Ed), The Minnesota Symposia on Child Psychology, 13, pp39-101.
- Block, J. & Kremen, A., (1996). IQ and ego-resiliency: Conceptual and empirical connections and separateness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, pp349-361.
- 畑 潮・小野寺敦子 (2007), 日本語版 ER (Ego-Resilience) 89 尺度作成の試み  
日本発達心理学会第 18 回大会 学会論文集, p 705.
- Klohn, E. C. (1996). Conceptual analysis and measurement of the construct of ego-resiliency. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, pp1067-1079.
- Letzring, T. D. Block J. & Funder, D. C. (2005), Ego-control and ego-resiliency: generalization of self-report scales based on personality descriptions from acquaintances, clinicians, and the self. *Journal of Research in Personality*, 39, pp359-422.
- Masten, A. S. & Reed, M. J., (2002), Resiliency in development. In Synder, C. R., & Lopez, S. J (Eds.) , *Handbook of positive psychology*. New York: Oxford University Press. pp74-88.
- Pals, J L. (1999). Identity consolidation in early adulthood:relations with ego- resiliency, the context of marriage, and personality change. *Journal of Personality*, 67, pp295-329.
- Werner, E. E & Smith, R. S., (2001). *Journeys from childhood to midlife: Risk, resilience, and recovery*. Ithaca and London. Cornell University Press.

## Influence of Ego-resilience on Mothers Child Rearing

Atsuko Onodera      Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2008 vol.4

### **[Abstract]**

This investigation examined the relationships between ego-resilience and mother's child rearing behavior and her recognition of child's characteristics.

Block's ER89 scale was used to measure the ego-resilience. Mothers who scored high ER tended to exhibit strong confidence in child rearing and flexible attitudes when they communicate with their children. On the other hand, low score ER mothers tended to show high level of depressive feelings and sometimes punish her child very severely. Ego-resilience is the ability to adapt the level of control(undercontrol and overcontrol).Recently young mothers have severe stresses to communicate with their own children.This study suggests that training mother's ER will contribute to improvement of the current mother-child relations in Japan.

**keywords** : Block's ER89, ego-resilience, ego-control, parenting